

# 北神塾

## 第3講「政治のしくみ 一政党政治の在り方と統治機構一」

2014. 7. 11 (金)

今日は、「政治のしくみ」ということで、三つくらいお話をしたいと思います。

一つは、民主主義。「私達の声が全然政治に届いていない」と言う声がよくありますが、じゃあ日本の憲法の中で、どのように「声」が反映されていくのか。これは多分皆さん大体分かっていると思いますけど、若干の誤解が結構あったりしますので、皆さんの声をどのように政治に…具体的に言えば、行政が実際に物事を決めていくわけですから、行政にどうやって反映していくのか。予算とか法律にどうやって反映させていくのか。

もう一つは、政党のことですね。「政党」というのは何なのかと。「北神さんは民主党のせいで落選してるんだから、あなた個人を応援したい」とか、こういうことを言う方もいたりするし、「政党なんかいらない。もっと直接、国会議員一人一人が自分の信念で行動してほしい」とか、こういう声もよく聞きます。じゃあなぜ「政党」というものがあるのか。それから、「与党」と「野党」とは何なのか、と。今、民主党は野党ですけども、「お前ら反対ばかりして、もっと協力したらいいじゃないか」とかいう声も時々聞きます。それをどういう風に捉えたらいいのかというのが二つ目。

三つ目は、私はずっとアメリカにいたことから、日本というのは非常に優しい国だと思います。皆の意見にすごく配慮する国だと。ただこれが政治になると、「リーダーシップが無い」とかね。皆の顔を立て始めると何事も出来なくなったりするんです。あるいは、ビシッと決断しないといけない時に曖昧な結

論しか出て来ないということがありますので、日本の指導力を今の政治の中で強化するためには何が必要なのか。日本の文化にもちょっと触れながら、この三点について話したいと思います。

レジュメにございますが、最初、「国民の思いはどうやって反映されるのか」ということです。皆さん大体は分かっていると思いますが、一番目に「国民主権」と書いてあります。これはもう憲法にはっきりと書いてあって、一番大事なところで、民主主義の証ですね。「国民が主権だ」と。一番、権力を最終的に持っているのが国民だと。皆、「政治家や官僚が偉そうにやってる」って言うんだけど、憲法上は少なくとも、国民に最終的な権力があります。

ここで一点言いたいのが、「権力」、「権限」というものには、必ず「責任」というものが付いてくるわけですよ。これは一体じゃないとおかしなことになります。これは会社でもそうですし、家庭でもそうです。やっぱり、「この人が決める」という場合は、その人が責任を取らないといけないわけですよ。逆に言えば責任の無い人に、「お前あれやれ」「これ決めてくれ」と言うのも、これはおかしな話です。責任が取れないので。ここは非常に大事なので、やっぱり最後は国民が権力を、権限を行使するわけですから、その責任というのも最後は国民に来ると。

レジュメで二つ目に、ちょっと難しい言葉ですが「議院内閣制」という言葉があります。日本が採用している政治の体制が「議院内閣制」なんですね。じゃあ議院内閣制じゃない民主主義の制度って何かと言うと、アメリカの「大統領制」とかがあります。大統領制と議院内閣制というのは、実は全然違うんです。今日こういう話をしている理由の一つは、皆すぐね、「アメリカの大統領はこうだ」とか、「アメリカの国会議員はこうだ」とかね、すぐアメリカの話

をしてね、「日本もそうすべきだ」っていうことを言うんですが、そもそも制度が全然違うんです。かなり違うんです、これ。日本の制度というのは、むしろイギリスの制度に似てるんですね。

レジュメ三つ目に、議院内閣制で国民の意見、考え方がどうやって反映されていくかというのを書いてあります。最初に、当然一般の「有権者」というのがある。その有権者が、選挙の時に「議員」を選ぶと。ここからが大事なんですけど、その選ばれた議員さんは、大体どこかの政党に所属していますね。その政党で議席数の多いところが、いわゆる「与党」ということになるわけです。実は…参議院の人に怒られますが、内閣を作るのは衆議院なんですね。衆議院はだからこそ「総選挙」って言いますし、「代議士」とも言いますね。参議院の方を「代議士」と言わないのは、衆議院は「代議員」として内閣を選ぶという重要な仕事がありますので、だからこそレジュメに「与党（衆議院）」と書いたんです。過半数を、あるいは最大多数を取っているところが与党になって、その人達の代表…党首、総裁が、事実上総理大臣になるんですね。これは全部憲法にはっきりと規定されています。そうして、まずは総理大臣を選んで、総理大臣が今度は大臣を指名して、大臣が選ばれていく。例えば、外務大臣だったら外務省、厚生労働大臣だったら厚生労働省、といったように、大臣がその役所を仕切るということになるんですね。ですから、役所が大体物事を決めますから、そこにどうやって自分達の意思が届いているかという、国民の意思というのは、まどろっこしいかもしれないけれども、こういうルートをたどっていったるんですね。だから、国会議員が、国会の審議で役所をいじめたりして国民の意思を反映するということがなくてね。与党が、総理大臣及び内閣を選んで、内閣がその役所を仕切るという、こういう形になってるんですね。

大統領制との違いは何かと言うと、今申し上げたように、日本の総理大臣と

言うのは、国会議員が選んでるんですね。最大与党の党首がなるんです。ですから皆さん多分、ここにおられる方もそうだと思いますが、アメリカの大統領と、日本の総理大臣と、どっちが権限をたくさん持っているかと言われたら、大体アメリカの大統領の方が強そうに見えませんか？多分皆さんも、日本の総理大臣というのはそんなに力が無いと思われているかもしれないですが、実はね、逆なんです。日本の総理大臣の方が、ずっと権限を持ってるんです。今言っているのは個人の資質の問題ではなくて、制度の、仕組みの問題ですね。それはどういうことかと言うとね、まず一番分かりやすいことで言えば、日本の場合は総理大臣というのは国会の多数の代表でしょう？いわゆる「与党」の代表。そしたらね、法案も予算案も、国会を通さないといけないという時に、過半数を持っているところが強いわけですよ、当然。その過半数の代表でしょう、総理大臣っていうのは。つまり今だったら安倍総理は、国会における最大の会派である自民党のトップでもあり、そして、内閣の、行政のトップでもある。つまり、行政と立法府、国会と役所。この両方共を、総理大臣が仕切ってるんですね。だから、基本的に自分が「これだ」と…例えば今だったら集団的自衛権でもね、「これだ」って言ったら基本的に、野党がいくら騒いでもね、与党さえきっちりまとまったら、全部通るんです。何でも通ります。

もう一つ言うと、国の予算案とか法律案。まあ法律は「議員立法」という形で国会議員が出すことも可能ですけど、基本的には内閣が出すんですね。予算案は、国会議員は作れません。内閣しか作れないんですね。もちろん、国会を通らないといけないですよ。通らないといけないけれども、さっき言ったように、内閣の政党は国会で過半数を取っていますから、必ず通るんです。いろんなパフォーマンスをしたりするけど、最後は絶対通るんです。あんまりやり過ぎると支持が落ちたりしますから、丁寧にやりますけど、最後は通るんですね。

ほなアメリカの「大統領」っていうのはどうなかと。大統領制というのは、大統領は大統領で別に選びますね、選挙で。で、国会議員は、これまた別の選挙で選ぶわけですよ。だから全然別なんですね。だから今もそうですけど、オバマさんは民主党、でも議会は共和党が仕切ってる、ということが場合によっては起こる。だから大統領の意見が必ずしも通らないんですね。もっと言えば、これ皆さん驚かれるかもしれませんが、アメリカの大統領に、法律を作ったり、予算を作ったりする権限は全然認められてないんですよ。自分では、「皆さんこの案を議論してください」とは言えないんです、アメリカの大統領っていうのは。

じゃあどうするのかと言うと、いつもテレビに、「予算教書演説」と、何かえらい派手に、与野党全部の国会議員の前で演説をしゃべりますね。あそこで、「私は大統領としてこういうアメリカを作りたいんだ、ですからこういう法律を作りたい、こういう予算にしてほしい」ということを訴えるんですね。訴えることしか出来ないんですよ、アメリカの大統領は。議会在それに従うかどうかは、議会の考え方なんですね。ですからねじれていて、オバマが民主党で、議会の過半数が共和党だったら、もう全然言うこと聞かないんです。

時々皆さん不思議に思うかもしれないですけど、アメリカでワシントンの役所が停電になったりすることがあるんです。予算が通らないので、役所の電気代とか、役所の給料が全く支払われない時が、大体五年～十年の間に一回くらいありますね。アメリカではそんなことが起きてても驚きません。つまり、役所がもう止まっちゃうんですよ。だから何か陳情に行ってもね、「予算が通ってないんでお引き取り願います」とか言われたりね。役所も守衛がいるくらいで、朝昼晩と真っ暗です。で、予算が通ってようやく動き出す。これは何なのかと言うと、大統領がいくら年度末に「予算が通らないと役所が停止して国民に迷

惑かけるぞ」と言っても、議会が「関係無い。お前が訳の分からないことを言っているから俺達は通さないんだ」と言う。こういったことが、日常茶飯事にあるんですね。日本だったらもうえらいことになりますよね、役所が停電になったりしたら。でもアメリカ人は、「これは民主主義の代償だ」と。「『民主主義』というのは、言ってみれば『独裁者』の反対だから、独裁制を抑えるためにはいろんな人の意見を聞かなあかん」と。それで、時々予算が通らないことも…もちろん、あんまりくだらないことで通らないようであればアメリカの国民も怒りますよ。でも、日本人ほど神経質にならないんですね。のん気だから関係無いというわけじゃなくて、「民主主義だからしょうがない」と思っているんですね。大統領制というのはそういうものだ。

だから大統領というのは、基本的に王様みたい、日本で言えば天皇さんに近いものなんですね。象徴みたいなものなんですよ。アメリカ人が皆で立てるからね、大統領を。「実際に権力が無くても、この人が我々の代表者であって、元首であるから、やっぱりこの人を蔑ろに扱っちゃいけない」と。後で日本の総理大臣とも比較しますが。そういうことで、何となく日本人からしてみたら、大統領が演説してる時でも、いちいち皆起立しますよね。これ演技ですから、皆さん。彼らの中にもね、内心「面倒くさいなあ」と思ってる人もいます。でも、そういう顔を絶対に見せちゃいけないと。なぜなら、「これが民主主義の根幹で、皆で選んでいる人を我々が馬鹿にしたりしちゃうと、民主主義は崩壊する」という、この「敬意」、「尊敬の念」から来ているんですね。個人に対する尊敬じゃないですよ。大統領という「職」、「制度」に対する尊敬ですね。「自分達がそれを馬鹿にしたら、外国からも馬鹿にされる」と。こういう緊張感から、そういう風になっているんですね。だから何となく日本人は「大統領はすごい力持ってそうやな〜」と思うかもしれないけど、日本の総理大臣に比べた

ら、実はそれほどではないということですね。

次に、そもそも政党は必要なのか。大体「政党」っていうのは、日本では本当に嫌われてるんですよ。「党」という字は、昔で言えばね、「徒党を組んでる」とかね。要するに、「皆がこっちの方向で行こうとしてるのに、何か一部の徒党を組んでるやつらがわがままなこと言ってる」とか。特に、郡部の方に行けば行くほどそうです。亀岡とか京北とか。誰も別に深くは考えてないんですよ。何となく市長とか町の有力者とか地元の議員が、「サッカースタジアム欲しい」と。「当たり前やで、そんなもんは」と言っていたら、何となく皆「そうなんかな〜？」と。そこで、「おかしい」、「こんなの財政的に持つのか」とか、「アユモドキが死に絶える」とかね、こういうことを言うと、「お前何だ、徒党を組んで。皆がせっかく一生懸命サッカースタジアム呼んで、町を興そうとしているのに」と。政党というのは、どちらかと言うとそういう一部の利益を代弁するように見られちゃうんです。

じゃあ何で政党が必要なのかと言うと、一番大事なのは、議院内閣制において、政権を安定させるために、ちゃんと内閣というものがある程度持続して仕事を出来るようにするために、政党というのは必要なんです。例えば政党が無いとしましょう。皆さんから、「北神、そんな政党辞めて、お前一人でお前の信念を語れ」と、「投票行動も、全部お前個人でやれ。民主党の意向なんて、どうだっていい」と、こういうことをよく言われるわけです。ほな、皆そうするとしますよね。そしたらね、毎日総理大臣は変わります。下手すると、一日に二、三回変わります。というのはね、例えば、外交は安倍さんがいいから外交の議論になっている時は安倍総理を選ぶ、と。ところが、社会保障の話になると、「安倍さんは社会保障削るばかりで、もっと社会保障を大事にせなあ

かん」と。ほな、「僕はもう安倍さんに不信任出す」という人達が出て来てね、それで総理がひっくり返って。こんな風に、ころころ変わります。まあ毎日かどうかは分かりませんがね。そんなね、何でもかんでも一緒の考えでいるっていうのはほとんど無いですから。そりゃ国会議員は700人もいるわけですから、テーマが変わるごとに、総理大臣、内閣というものは下手すると変わってしまうと。

政党というのは、大体基本的な方向性っていうものを皆共有して、自分が個人的に「俺は違う」と思っても、基本的には従いましょうと。そういうのが政党ですよ。組織ですから。だから、政党があって、「この総理大臣を我々は選ぼう」と言ったら、スキャンダルとか、皆で決めていた政党の公約からあまりにもかけ離れたことを総理大臣がやり始めたからとか、余程のことが無い限りは基本的には支えましょうということで、政党というものは政権を安定させるんですね。だから、政党にいと、北神の考えと全然違う考えでも従わないといけない、というところに皆さん不満をお持ちなんだけど、まさにそういうことがあるから、政権というものが支えられるんです。ですからそういった意味で、政党が無い政治なんかはあり得ないし、これは実際に古今東西、少なくとも民主主義においては、政党の無い政治は存在したことが無いです。

もう一つ皆さんが嫌がるのは、さっき言ったように、「全体の利益じゃない」と。「国民皆のことを考えてない。一部の人達だけだ」と。民主党だったら、「組合の人達しか代表してない」と。あるいは自民党だったら、「建設や農協の人達だけを代表してる」と。色々言いますよね。それは何なのかということなんですが、英語では「政党」のことを“party”って言うんですね。これは、お酒飲むパーティーじゃないですよ。“party”の語源は、ラテン語の“partita”です。“partita”って何かと言うと、「分ける」とか、「分割する」とか。日本

語でも、「部分、部品」のことを「パーツ」って言ったりしますよね。そういう語源から来ている言葉なんですね、「政党」というのは。あくまで国民の一部、「パーツ」を代表する政治団体なんです。元々そうなんです。だから、それに「皆の代表をなささい」と言うのは、そもそも政党に期待されていることではないんです。

それについてももう少し言うと…二つ目に繋がりますが、「じゃあ国民の『全体』って何なの？」と。「『全体』の利益、『全体』の思いを代弁しなさい」と言われても、「それは一体何なの？」と。例えば、あなたがたまたま毎日喫茶店に行つてつるんでいる人達だけがそう思っている場合が多いわけですよ。あるいは自治会でね、「こういうことを皆言ってる」とか。「全体」と言っても、皆いろんな立場がありますしね。いろんな台所事情があるし。いろんな地域事情があるし。「全体」ということは、ほとんど具体的な中身が無いんですよ。だから「全体」を代表するというのは、さっきもサッカースタジアムの話をしましたけど、そんなものは、本当は無いんです。でも、個別に、例えば農家の人達は「農業をちゃんと活性化してほしい」と。これは、はっきり具体的にあるわけですよ、利益が。だから政党っていうのは、そういうものをそれぞれ代表しているんです。

「全体を代表する」というのは、昔戦前に「大政翼賛会」というのがありました。これは戦争に突入する中で、政党を解散するんですね。政党をあつた時は全部無くしたんです。全部解体するんです。それで、皆個別に天皇のもとに集まって。そうしないと、戦争に行く時にいろんな意見を言われるとややこしいから、皆で突入するっていうのが大政翼賛会なんですね。よく今でも、例えば連立を組んだりすると「こんなのは大政翼賛会だ」「戦前の独裁制を思い出させる」と言う人いるよね、テレビとかで。でもそれはちょっと違ってい

てね。大政翼賛会っていうのは政党そのものを無くしちゃうんですね。だから、「部分の利益」「部分の代表」っていうものを無くしちゃうんです。

「連立」というのは、同じ与党にいても自民党と公明党のように…まあ最近集団的自衛権の件では公明党さんもあまり自分の主張を通さなかったですけど、それでも安倍さんも、集団的自衛権について何か説明する時には、やっぱり連立のパートナーである公明党の政党としての意向を気にしながら喋りますわ。皆さんあんまり気付かないかもしれないけれども、私らから見たら、「本当はこう言いたい」というところを、すごく気を遣ってまろやかに喋っているところもあります。だから、連立をするからといって「大政翼賛会だ」とか言うというのは、ちょっと極端な表現であります。大政翼賛会は政党を無くしているので。天皇陛下っていうのは、国民全体の代表じゃなくて象徴なんですね。だから、天皇陛下が全体の代表として何かを発言されるとかね、そういうことは憲法では全然予定していないということです。

三つ目なんですが、「じゃあ北神さん、『部分の代表』って、まあそうだとしなくても、そんなもの、部分の代表の人達だけが出て行って、国がよくなるのか」と。「一部の組合の言うことをやったり、農家の人達の代弁をしたり。そんなので国はよくなるのか」ということなんですが、これは議院内閣制ではどういう考え方かと言うと、部分を代表する政党が競争しますよね、いろんな形で。選挙とか、あるいは国会の中で討論、質問したりね。あるいはテレビで各党の代表がお互い討論すると。そういう競争をすることによって、全体の利益が実現されるという考え方なんです。

これは、極めて欧米の、特にイギリス、アングロサクソンの考え方です。幸か不幸か、近代民主主義っていうのは大体彼らの思想ですからね。商売でもそうです。よく、「競争させなければいけない」とか、この25年くらい、日本

でも流行ってますよね。経済でも、「規制で守られているようなのは駄目だ」、「郵政もあんな役人に守られているようでは駄目だ。他の金融機関と競争させなアカン」と。この「競争」というのは、民主主義も全く同じ発想でやってるんですね。これは、イギリス人の発想です。個人がそれぞれ、企業の経営者とかは、己の利益を追求していくんですね。近江商人とか、そんな発想は無いんです、アングロサクソンには。三方を立てて、俺も利益ある、従業員も利益ある、地域にも…とか。こんな発想ではないんですよ。「俺は儲けたい」と。「俺はそのためにはこの商品で勝負したいんだ」というのが、欧米人の考え方です。それで、市場で競争させて…例えば靴を売るとなると、いろんな会社がありますよね。皆それぞれ自分達の利益を追求して儲けようと。消費者がそれを判断して、「こっちが安いから買う」とか。「こちらは値段高いけど質がいいから買う」とか。「流行ってるから買う」とか。そこでいろいろ選ばれる。それで勝ち抜いたところが、一応皆が一番良しとする商品だ、という考え方。これが欧米、特に英米人の考え方ですね。フランス人とかはもう少し日本人に似てるんですけど、英米人…海賊、バイキングの末裔ですわ。この人達が、こういうの好きなんですよ。バイキング時代から、海を漕いでフランスの沖に来て、戦ったり物を略奪したりしてね。この人達の末裔が、同じように…もう血がたぎってるわけですわ。競争してね。戦ってね。戦いを肯定する思想なんです。

だから議院内閣制もそうで、政党は「己の利益」なんです。「俺達の利益を実現するために政権を取りたいんだ」と。アングロサクソンっていうのは、ある意味では正直なんですよ。つまり、「皆のためって、そんないいやつなんかいるわけ無い」と。皆が「俺が権力を取って自分の代表する人達の利益を守りたい」と。そういう発想なんです。ところが、ちゃんと公平に競争させることによって、経済で言えば消費者、民主主義で言えば有権者が判断して、「皆自

分達のために言ってるけど、この政党が自分達にとっては一番いいだろう」ということで選んで、その人が政権を取って、それが一応全体の利益という仮定になるんですね。これが民主主義の、議院内閣制の考え方です。

競争の場というのは、国会での審議やメディアでの討論、普段の政治活動。例えば、「なんや最近北神は運動会には来いひんけど、もう一方の人はよう来とる。この人なら自分達庶民の方にもっと聞く耳を持ってるんじゃないか」というのを私が聞いて、「うわあ、俺も行かなあかん！」と。こういう競争によって皆で…いや、運動会に出るのがいい政治になるかどうかは別ですよ！別ですけど、そういう競争にさらされるわけです。こういう競争が無ければ、私は胡坐搔いて、「俺はどうせ権力握ってるから、落とされる可能性も無い」という風に緩んできて、「俺はもう運動会…」いや、運動会じゃなくてもいいけど、「国民の声なんか別に聞く必要無い。俺が決めるんだ」という風になってくるわけですね。だから、アングロサクソンの考え方というのは、こういう「競争」なんです。

レジュメの3の二つ目ですが、さっき言ったように、経済でも…これはアダム・スミスという経済学者が、皆個別の、自分の利益を競争させて…「神の見えざる手」という言葉を使うんです。何の根拠も無い言葉ですわ、これ。キリスト教徒にしか分からない言葉なんですけど、「神の見えざる手」によっていつの間にか部分の利益が全体の利益になるというのが、アングロサクソンの人達の考え方で、これは民主主義にも濃厚に反映されているということです。

ここで政党について、まだ時間があるので言いますと、与党の話を先程までしました。与党というのは、総理大臣を作って内閣を作って、そこで行政の立場で予算を作ったり、外交をしたりね。TPPの交渉に出て行ったりすると。こ

これはまあ与党の仕事です。で、野党の仕事っていうのはね、基本的には議院内閣制では「反対すること」なんです。何も自分の対案を示したり、自分の政策を新しく述べたりするのが野党の仕事じゃないんです。これも誤解があるんです。

議院内閣制のイギリスでは、与党のことを“government party”、“government”は「政府」ですから、「政府党」と言います。「政府の党」なんです。だからまあ「行政の党」だと。野党のことを何と言うのかと言うと、“opposition party”と言うんです。“opposition”というのは、動詞“oppose”から来ていて、「反対する、対立する」という意味なんです。ですから「野党」と言うと分かりにくいんですけど、そもそも、その名前自体がイギリスの本場の言葉で言えば「反対党」という意味でありまして、反対することが仕事なんです。なぜなら、さっき言ったように、議院内閣制では、政府与党というのは強力な権限を持っているわけですよ。だって自分達が行政を仕切っていて、法律も予算案も自分達で出して、しかも国会では自分達の仲間が過半数取ってますから、もう基本的に通るんです。それに対して、あんまりやり過ぎないように野党というのはしっかりと、基本的には反対していくと。もちろん、何でも反対するのは駄目です。是々非々じゃないといけないんですけど、何も政権に協力することを求められているわけじゃないですよ、野党というのは。

高坂正堯先生が昔おっしゃいましたけど、一番健全な与党と野党の在り方は、8割くらいが同じ政策だと。8割くらい、そんなに変わらない。与党も野党も。で、2割がちょっと違う。例えば、外交安全保障はそんなに変わらないけれども、年金政策については違うとか。労働政策について違うとかね。そこだけがちょっと違う、それが一番いいと。100%違ったら議論にならないと。でも、高坂正堯が言ったのは、「8割同じでも、違う2割のところでは闘わないと

いけない」と。「そこを野党はどんどん主張していかないといけない」と。国民の皆さんからしてみたら、「そんな反対ばかり言って、もっと協力したらいいのに」っておっしゃるかもしれませんが、そういうことをしたら、何でもかんでも総理大臣、内閣の言う通りになってしまって、さっきの大統領制じゃないけど、やっぱり緊張感というものが…そこにしか無いんですね、逆に言えば。もう野党が頑張るしかないんです。アメリカの大統領制だったら、大統領と議会が別々ですから、そこで色々やり合いますがありますが、日本の場合は野党しか反対出来ないんで、野党の役割というのは基本的に反対することなんですよね。

これはイギリスの過去の総理大臣も皆そうです。日本の政権交代前の民主党の時によく、民主党が何か批判すると、「お前ら批判ばかりじゃなくて対案を示せ」ということを言われました。対案というのは例えば…年金で言うと、「受け取る金額を増やせと言うなら、財源を示せ」と。「財源を示せないのなら、それは単なる批判だ」と。でもね、皆さん、批判でいいんです。民主党が対案を示させるんじゃないで、民主党が言ったことに対して、説明責任を負うのは政府与党なんです。もっと年金を増やさないといけないと言われたら、自民党から、「こういう事情で、年金よりも経済活性化のために公共事業をやらないといけない」とかね。そこに皆さんがむしろ期待をしないといけないんですね。野党なんかに対案を示させるんじゃないで。

元々憲法上、議院内閣制の制度上、そんなことは予定していないんです。だから野党なんかにそんな情報は無いんですよ。私も役人やってたからよく分かるんですよ。与党と野党の議員にね、同じ「消費税増税について説明に来い」って言われますよね。もう全然、資料からして違うんです。与党の人に説明する時は、ものすごい分厚い資料持って行ってね、「いや～もう先生、ご苦労さ

んです。明日みのもんたの番組出るんですよ！？消費税っていうのはこういう理由でね、あと明日はおそらくみのもんたがこういうことを言います。それに対してはこういう反対をしてください。その裏付けのデータはこれです」と言って、細かく丁寧に説明するんです。情報を全部あげるわけです、与党には。野党には、もう一枚紙くらい持って行ってね、「いや〜…8%に上がりますわ〜」と。「何でなん？」って聞いたら、「いや〜、もうあの〜…そういうことに決まってるんですよ〜」…とかね。要するに、もう適当ですよ。でも、それでいいんです。なぜなら、例えば財務省の役人というのは、与党の財務大臣の部下であって、野党の議員の部下じゃないですから。そんな何も言うこと聞く必要無いんです。

だからこそ、国民も野党にあんまり過大な期待をしちゃいけないんです。野党に関しては国民の立場に立って、「これはおかしい」というものをバシバシ言って、「じゃあ具体的にどうするのか」とかそんなことは、与党がしないといけないことなんですよ、反論する時に。それで闘わせて、野党がこう言ってる、与党はこう言ってる、それで選挙の時にどうなのかっていうのを有権者が決めるというのが、民主主義のゲームのルールなんですよ。これは欧米人が作ってきたルールなんです。だからこのルールを分らないと、判断がつかないわけですよ。どっちがちゃんとまともにやっているのかという判断がつかないから、やっぱりこのルールというものを理解しないといけないという意味で、今日こういう、政党とは何か、与党野党の役割とは何かという話をさせてもらいました。

レジュメ3つ目の○で、「指導力ある政治を実現する」と。レジュメの1にも書いてありますが、大体日本人って、あんまり「指導力」というものを…

今は流行ってます、この20年くらい。「リーダーシップのある強いリーダーが必要だ」とか皆言いますが、私からすると、日本人ほどリーダーシップが嫌いな民族はいないんですよ。皆さん大体会社でもそうでしょうか？社長も皆従業員に気を遣ってね。中小企業の人達でも、赤字の時でもボーナスを減らす前に自分の車を売ったりね。日本のリーダーというのは、本当に皆の顔を立ててね、皆の意見を聞きながらやらないと…もちろんワンマンな人もいますが、大体皆さん追い出されたりね。あるいは皆に陰口叩かれてね、取引先からも「いや、あんたちちょっとやり過ぎちゃいまっか」と言われるくらい、どんどん真綿で首を絞められるような状態になってくるんですね、日本のリーダーというのは。

これについては、白川静先生っていう、もうお亡くなりになったんだけど、立命館でずっと教えてこられた、私も尊敬する学者で。桂にお住まいだったんですが、この方が書いているんです、政治について。中国との比較をしているんですね。まず言っておきたいのが、中国の方が欧米人に似てるんです。権力の考え方とかね、政治に対する考え方が。ちょっと長いですが、レジュメの引用部分を読みます。「政治」という言葉は音読みで、大和言葉では「政（まつりごと）」って言いますね。古代から、政治は「まつりごと」だと。レジュメの「」内が白川静の文章です。

政治の「政」について、「政は軍事的な征服によってその支配を行なうこと」ですね。政治の「治」、「治山治水」の「治」ですね。山を整えたり、洪水にならないよう河川整備をする。このように、「治は治水のような国土の経営によって国を治めることであり、政治とはそのような支配と経営の総体をいうとみてよい」と。もう露骨なんですよ。政治の「政」っていうのは、軍事的に支配することなんですよ。政治の「治」っていうのは、経営のことなんですよ。一

つの事業をビシッとやると。中国でそういう意味で「政治」という言葉は使われてきたと。ところが、じゃあ日本はどうかと。

日本に「政治」という言葉が輸入される前、漢字が来る前は、「まつりごと」という風と呼んでいたんですね。「我が国では「まつりごと」は祭政的な支配の形式」…「祭政的」っていうのは、ちょっと宗教的な、宗教がかった政治の支配を意味する。天皇陛下を見ていたら分かりますね。天皇陛下っていうのは全ての神社の総本山みたいなもので、「鎮守さま」ですわ、日本国家の。何かをビシッと決めるわけでもないけれども、何をされているかと言うと、毎日朝から晩まで、国家繁栄、五穀豊穰をお祈りされているわけですね。ですから、非常に宗教的なものなんです。当然、昔はもっとそういった色彩が強かったということです。そして、「そのような宗教的な権威をそのまま奉戴することが「まつろふ」であり、その上下の秩序に随順することが「したがふ」であった。これらの関係語彙の意味するところによって、中国古代の征服支配による経営的な政治のありかたと、我が国の、祭政的な形態をのちまでもとどめていた政治のありかたの相違を、見出すことができるように思う」ということを、白川静は言っているんですね。中国で言う「政治」と、日本で言う「政治」っていうのは全然違いますよ、と。こういうことを、彼は漢字の成り立ちからおっしゃってるんですね。

中国っていうのは、実は欧米に似てます。欧米もそういう発想です。「権力」は英語で“power”と言いますよね。“power”っていうのは本当に、暴力的な「パワー」と同じ言葉です。要するに、「力がある、腕力がある」という意味ですね。そっちの方が、実は中国人に近いものがある。だから大体アメリカの政治家なんかは、外交で中国の政治家と接する時と、日本の政治家と接する時と、どっちが本当にすっきりと理解し合えるかと言うと、中国の政治家です。

「日本の政治家は、ちょっと意味分かん」と。「何言うてるのか分かん」と。それは、経営したりする感覚があんまり無いんです、中国の政治家に比べたら。

まあ、皆の意見を聞きながらやるっていうのは、一種お祭りなんですよ。神輿を担ぐ時も、一人だけが目立ったり仕切ったりしちゃ駄目なんです。そしたら皆引いちゃって、「ああもう勝手にやりなさい」と言って、誰も神輿を担がなくなる。やっぱり、頭下げてね、皆にお酒をおごったりしてね。それを日頃からやらないといけない。「あいつが言うんだったら担ぎに行こうや。でもあいつが言うんだったら絶対行かんで」と。ほなもう全然まつりごとには行なわれなくなるわけですよ。これが日本。そんなの西洋だったらね、あるいは中国だったら、そんなもの許しません。もう強制的に、罰則をかけたたり、罰金をしたり。そういう発想に行くわけですよ。「はい、神輿担がない家全部罰金！」とかね。そういう考えで、欧米人とか中国人っていうのはやります。

担ぎ手なんか、日本の場合皆が代わり番こにやるでしょ。あれは、日本の大臣のイスと一緒にすわ。「おいお前、ちょっと長くやり過ぎだから俺に代われ」と。皆お互い引っ張り合って、「自分がやる」と。ちょっとしんどくなって重たくなると、皆だんだん引いてきて、ちょっと知らん顔して、「俺は担がないよ」と。人が担ぎながら「代わってくれ」と言っても、誰も皆知らん顔すると。これも非常に日本の政治に似てます。これが中国人、アメリカ人だったらまず、試験をしますわ。体力測定、とかね。神輿の経験はどれくらいか。神輿のルートをどこまで暗記しているか。そういう試験をして、精鋭の人達選ばれて、ちょうどアメフトのコーチみたいに、皆イヤホンか何か入れられて、仕切ってる人が「はい、30度北に行きなさい」とか言って、皆がピシッと動くと。これが、大体欧米人とか中国人の発想です。政治も一緒です。日本人は、本能的

にそういうのが嫌なところがあるわけです。担いでいる人達も何が何だか分からない中で担いでいて、誰かがおもちゃみたいなメガホンで「\*%@#※\$~!」とか、何も聞こえないんですよ、喧騒に紛れてね。時々長老が出て来てね、「お前何やっとなねん！俺らが若い時はもっと気合い入ってたぞ！」とか言われてね。これ日本の政治と一緒にすわ。こういうことをやって、ぎこちない、ギクシャクしているけど、何がいかって、最後に足洗の時に皆お酒飲んでね、「皆参加した」と。「よかったな〜」となる。ただ、欧米とか中国は、最初から試験で落とされた人がいるとかね。すごく厳しいわけですわ。そういう意味でちょっと違ふと。

ちょっと話が脱線してますから終わりにしたいんですが、レジユメの2にいきます。私は、もうちょっと日本も指導力が必要だと…今の安倍さんも指導力を発揮してますが、これも怪しいもので、アベノミクスで支持率が高いから。自民党の中でも、本当は TPP 反対とかね、集団的自衛権反対の人達たくさんいるんです。聞こえてこないだけでね。何で黙っているかと言うと、一つは、民主党の反面教師で、「あんまりバタバタすると、民主党みたいになるで！」と。これが一つね。もう一つの理由が、支持が高く人気があるから、反対したら自分が評判悪くなるわけですよ。反対したら、自分が地元に戻った時に「安倍さんせっかく頑張ってるのにお前何しとなねん」と言われるわけですね。だから黙ってるだけです。だから本当の意味の指導力じゃなくて、歴代の総理もそうですけど、人気がある時は皆言うこと聞くけど、人気下がったらもう駄目なんですね。

そこでなぜ強い指導力が必要かと言うと、本来はね、日本的なあり方は私一番いいと思うんです。皆が幸せですから。ただ外交とか、安全保障の時にはね、

人の意見とかそんなに聞いてられないんです。瞬時に、あるいはかなり大胆な決断をしないといけないという時には、日本のやり方というのはものすごく遅いし、はっきりした決断が出来ない。だから今みたいな時代、外交や防衛に危機のある時代というのは、やっぱり強力な指導力が必要だと私は思います。あとは金融恐慌とか、東日本大震災。こういう時には、やっぱり指導力が無いと物事が中々進まない。

レジュメ最後の3にいきます。さっき言ったように、議院内閣制の総理というのは、そもそも強い権力だと。大統領制との比較もしました。で、現実には、何で日本の総理が弱いのかと言うと、レジュメにも書いていますが、「自分の政党を制する総理は、政治を制する」と。民主党なんか見てたら分かりやすいですけど、自分の政党をまとめなかったら、せっかく国会で過半数取ってても、身内から反対が出ちゃうと、全く意味が無くなるわけですよ。だから、どうやって自分の政党をまとめるのかというのが総理大臣の権力を強化する一番大事なことですね。

例えばオーストラリアとかイギリスもそうですけど、国会議員が、個人で資金援助をもらえない制度になってるんですね。全部政党を通さないと、お金をもらえない制度にしてるんです。なぜそういう風にするかと言うと、国会議員をサラリーマン化するわけですよ。要するに、自分でお金を稼げないようにするわけですね。政党のお偉いさんからもらわないといけないと。そうなるよ、よほどの信念が無い限りは、皆言うこと聞くわけです。会社のようにね。だから、実は他の国はそういうことをしてるんです。ところが、日本人はそういうのを本能的に嫌がるんですね。「政党の駒みたいだ」と。でも、さっき言ったように強力な権力を総理大臣に持たせるためには、政党というものはビシッと

まとまってないと出来ないので、日本というのはそういうところがかなり緩い  
ですから、「まつりごと」ですから、もう少しそういったところを強化しないと  
いけないなと思います。

最後に、レジュメに「役所を抑えるには、大臣の経験と実績」とあります。  
レジュメ冒頭、一枚目の最初の○の3に書いていますが、『「選挙で国会議員が  
選ばれて、総理大臣が選ばれて、各大臣を選んで、その大臣が役所を仕切る』  
って北神さん言ってるけど、全然役人は言うこと聞かないやん」ということが  
あります。これはやっぱり大臣の経験と実績で抑えるところですが、そういう  
人はほとんどいないんです、日本は。時々いますけどね。政党も、そういう大  
臣を育てるように、人事を企業と同じようにしないといけないんです。今まで  
はほったらかしでね、大臣なんか皆にやらせてたんです。自民党なんか、ほと  
んどの人が大臣経験者です。大臣にならなかった人は、二人くらい。それ以外  
は皆なってるんです。何百人もの大臣が誕生してるんですね。じゃあ、皆そん  
なに能力があったのか。そんな見識があったのか。そんな経験があったのかと  
言うと、無いです。「お前もう次選挙厳しいから、大臣にしたるし故郷に錦を  
飾って来い」というぐらいの発想でやってたんですね。その発想じゃ、役人が  
とても言うことを聞く気にはなれないです。言ってることがわけ分からないか  
ら。だから例えば私なんかは経済産業畑で、大蔵省にもいたと。そしたら「北  
神を財政・金融・経済の専門家にしよう」ということで、人事的に、若い頃か  
ら、野党の時は「委員会は経済産業の委員会に行きなさい」とかね。それで与  
党になったら「経済産業の政務官になりなさい」と。こうやって育てていくの  
が、官僚を抑える非常に重要なところですね。

ということで、今日は…そんなに難しくなかったでしょう？ちょっとタイト

ル失敗しましたわ！こんな難しいタイトルにしちゃったけど、まあ自分達の意見がどうやって通っていくのか、それから、議院内閣制の仕組みはどうなっているのか、与党・野党の役割はどうなんかと。指導力、権力の強い政治体制っていうものが日本にはあんまり無かったけど、今のようない時代には多少持たないといけないと。そのためにはどうするのか。政党をまず抑える、ということですね。ということで、今日のお話を終わらせていただきたいと思います。ありがとうございました。

〈第3講終了〉